

Title	奥野信太郎年譜
Sub Title	A chronological personal history of the late professor Shintaro Okuno
Author	藤田, 祐賛(Fujita, Yuken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.426- 432
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0426

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥野信太郎年譜

明治三十二年（一八九九）

十一月十一日、陸軍中將奥野幸吉の長男として当時の東京市麹町区紀尾井町三番地で出生。母は子爵橋本綱常（橋本左内の実弟）の長女政子。

明治三十三年（一九〇〇）一才

父が北清事変に出征したため、麹町区山元町三丁目四番地に移転。

明治三十六年（一九〇三）四才

番町尋常小学校附属幼稚園に入園。

明治三十七年（一九〇四）五才

麹町区平河町六丁目二番地の借家に移転。まもなく四谷区仲町原田某の持家に移転した。

明治三十九年（一九〇六）七才

番町小学校に入学。赤坂区青山南町六ノ十四番地に移転。外祖父橋本綱常の平河町の自邸で竹添井々から漢籍の素読を受けるよう命ぜられた。これはたいそう苦痛であったと言う。

明治四十一年（一九〇八）九才

赤坂区青山北町一ノ八番地に移転。素読は続いた。

明治四十五年（一九一二）十三才

神田区淡路町の開成中学に入学。浅草区左衛門町一番地の叔母の所に移り、以後五年間暮した。この間に東京帝国大学生長瀬古保次

(後の貴族院書記長)と起居を共にして学事指導を受けたが、この人から飲酒など教えられ、大きな影響を受けた。また住居の近くに市村座、柳盛座、開盛座などがあつて、さかんにそれらの劇場に出入した。

大正四年（一九一五）十六才

秋に麻布笄町長谷寺で開かれた外祖父綱常（明治四十二年没）の建碑式に参列し、発企人の一人森鷗外に初めて引見させられ、漢文学の大切なことを言われ、大いに感激したと言う。この頃から、永井荷風、上田柳村らの作品に心酔し、さらに「珊瑚集」や「海潮音」の幾篇かを更に漢訳したりした。

大正六年（一九一七）十八才

父の命によつてやむなく陸軍士官学校を受験したが、二日目の試験を受けなかつたために合格を免れた。この一件が発覚して、父と叔母からひどく叱責された。

この頃から浅草オペラの常連となり、ほとんど毎日数時間公園で過した。

大正八年（一九一九）二十才

叔母と共に下谷区岡崎町十番地に転居。スペイン風邪に感染して肺炎をおこしたが、危うく一命をとりとめた。

大正九年（一九二〇）二十一才

慶應義塾大学文学部予科入学。荷風を慕つて入学したものの、すでに三田を去つていたので、大いに落胆した。国文の小嶋政二郎、作文の久保田万太郎、クラス主任の戸川秋骨らから教えを受けた。同級には藏原伸二郎、青柳瑞穂の両氏がいて、この二人とは一生親交を続けた。この年十二月二十八日に父幸吉病死。

大正十年（一九二一）二十二才

大久保百人町の仮寓で母と住み、同町に住んでいた青柳氏と日夕来往した。

大正十一年（一九二二）二十三才

中野町本郷一〇八番地に新築し、母と共に住んだ。この頃から三田文学にものを書き出した。

大正十二年（一九二三）二十四才

母死去（四十五才）。家産が自由になつた為浪費生活がはじまつたが、さかんに古書も購入し、一生のうちでもつとも自由大胆な生活をおくつたと言う。

大正十四年（一九二五）二十六才

五月、慶大文学部卒業。卒業論文はダンテの神曲の研究であった。卒業と同時に坂東智恵子（後に孝宮和子内親王の乳人となつた）と結婚した。また興諭野寛の推薦で神田駿河台の文化学院の教壇に立つた（同校には昭和十八年の閉鎖まで勤務した）。さらに九月からは慶大予科講師となり漢文を担当した。十一月に長女檀出生。

昭和四年（一九二九）三十才

長男正哉出生。

昭和十一年（一九三六）三十七才

外務省在華特別研究員の選に当り、北京に留学することになつたが、五月十六日妻智恵子が急病で逝去した。その悲しみを抱いて、夏單身北京へ出発。北京孟公府箭桿胡同十三号の中日実業公司公館に仮寓した。音韻学者趙蔭棠と親交を結んだ。

（附記）北京にゆく前までは麻布市兵衛町二十七番地に住んでいた。いつからここに住んだかは目下不詳。

昭和十二年（一九三七）三十六才

十一月三日北京二条胡同東亞病院長八木繁雄の妹薰と婚約、中國流の訂婚式を挙げた。年末近く熱河を経て満洲各地を旅行した。

昭和十三年（一九三八）三十九才

四月、薰夫人と帰国、戸川秋骨の媒約によって結婚。慶大予科教授に任せられ、同文学部講師を兼任した。（支那文学担当、隔年出講）十一月末、世田谷区代田二丁目八五〇番地に移転。年末次男燕兒出生。

昭和十五年（一九四〇） 四十一才

暑中休暇を北京で過した。

昭和十七年（一九四二） 四十三才

四月より慶應義塾語学研究所所員（第二一部）となつた。

昭和十八年（一九四三） 四十四才

一月より慶應義塾語学研究所所員（第二一部）となつた。

昭和十九年（一九四四） 四十五才

十月、北京輔仁大学に訪問教授として招聘され、一年間日本近代文学を講義することになった。

昭和二十年（一九四五） 四十六才

終戦のため帰国できず、特別留用者として輔仁大学に職を奉じた。

昭和二十一年（一九四六） 四十七才

四月帰国。五月、慶應義塾大学予科教授に復職。外国语学校講師、文学部講師を兼担した。

昭和二十二年（一九四七） 四十八才

三月、慶應義塾大学予科教授に昇任した。

昭和二十三年（一九四八） 四十九才

一月、慶應義塾大学予科教授に昇任した。二松学舎専門学校に出講（二松学舎大学になつても出講し、昭和二十七年に退職）。

昭和二十四年（一九四九） 五十才

三田文学会の会長となる（昭和三十七年三月まで）。

日本中国学会が創立し、その理事となつた（以後没年まで同会の専門委員等の役員を歴任して、学会の発展のために大いに尽力し

た)。

昭和二十五年（一九五〇） 五十一才

四月より清泉女子大学に出講（昭和二十八年三月まで）。

昭和二十六年（一九五一） 五十二才

四月より慶大大学院文学研究科をも担当、中日比較文学を講義した（没年まで）。

昭和二十七年（一九五二） 五十三才

一月八日より毎週一回、NHKラジオ放送の「番茶クラブ」のメンバーの一員となり文化社会時評を行なつた（昭和二十八年四月五日まで続いた）。

四月より都立大学に出講（昭和二十八年三月まで）。

昭和二十八年（一九五三） 五十四才

森鷗外の「魚玄機」に取材した脚本「長安城の月」が、二月新派によつて新橋演舞場で上演された（この劇は昭和三十一年二月にも東西歌舞伎によつて大阪文楽座で上演された）。

昭和二十九年（一九五四）

四月、日本美容専門学校（高田馬場）の創立とともにその校長となつた（没年まで）。九月、学術文化使節団々員として中華人民共和国に招聘された。

昭和三十年（一九五五） 五十六才

四月より東京大学に出講、中国の芸能について講義した（昭和三十一年三月まで）。毎日出版文化賞選考委員となつた（没年まで）。

昭和三十一年（一九五六） 五十七才

四月より成城大学に出講（昭和三十三年三月まで）。

六月、訪日京劇代表団（団長梅蘭芳）の来訪に際し、劇の解説などに活躍し、多忙を極めて眼球出血をきたした。六月二十三日からNTBの座談会「雨・風・疊」のメンバーとなつた（昭和三十四年まで）。

昭和三十三年（一九五八）五十九才

芸能学会の副会長となり、編集委員にもなつた（没年まで）。

昭和三十四年（一九五九）六十才

四月より早稲田大学第一政経学部に出講（没年まで）。

十二月一日からNTB座談会「春・夏・秋・冬」のレギュラー・メンバーとなつた（没年まで）。

昭和三十五年（一九六〇）六十一才

十月四日より十二月二十七日までの十三回に及ぶNHK教養大学放送で「中国の小説」と題して放送を行なつた。また十月からNETの「女の座」を担当した（昭和三十七月九月まで続いた）。

昭和三十六年（一九六〇）六十二才

秋、松竹の歌舞伎審議会の委員となつた（没年まで）。十月、かるい高血圧症のため倒れ病臥した。

昭和三十七年（一九六一）六十三才

六月、「聊齋志異」に取材した脚本「秋燈記—美女と閻魔—」が歌舞伎で上演された。

昭和三十八年（一九六二）六十四才

読売文学賞委員（第十四回より）となつた（没年まで）。

四月より桐生市桐が丘女子短大の講師（兼任）となつた（没年まで）。

昭和三十九年（一九六四）六十五才

一月二十日から二回にわたってNHKのFM放送「朝の講座」で「中国文学十二講」と題して放送を行なった。

六月に痛風を病む（以後毎年のようになやまされた）。

また十二月には脳血管痙攣のため倒れ病臥した。

昭和四十二年（一九六七）六十八才

十二月十八日から二十二日まで五回にわたってNHKテレビの「女性の手帖」で「わたくしの唐詩選」と題して放送を行なった。

昭和四十三年（一九六八）

一月十五日、成人の日の記念講演のため朝から葛飾総合区民センター体育館に行き、午前・午後の二回の講演の後、上野を経由して浅草に行き、古書を涉獵した後、午後十一時過ぎに浅草から帰途につき、タクシーの中で心臓喘息の発作をおこして両国橋たもとの加藤病院に入つたが、十一時四十分、ついに永眠した。享年六十八才二か月。一月十九日、麻布長谷寺（永平寺別院）で葬儀執行。法名は醇信院凱南玄悌居士（「凱南」とは「詩經」の詩からつけた号で、生前から用いていた）。

附記：右に誌したほかに、北海道大学、教育大学への出講やあづま踊りの脚本「牡丹亭還魂記」の上演（杵屋六左衛門作曲）などが
あるが、出講、上演などの期日は目下不明である。なお昭和二十一年以後に担当した講義の題目は中国文学史、中国小説史、
中国芸能史、中国現代詩概説、唐詩演習、明清作家論、明清小説論、魯迅研究、丁玲研究等である。
（藤田祐賢記）